
D・C?なのはs t r i k e r ‘ s 漆黒と桜花の剣士

京勇樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C?なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士

【Nコード】

N4465Y

【作者名】

京勇樹

【あらすじ】

1年中桜が咲く初音島、ここでは現在最先端技術で魔法と科学が取り入れられて、デバイスが普及していた

そして少年には暗く悲しい過去があった、少年は裏の世界で生きて戦っている

少年は幸せに生きられるのか？ そして誰が少年を救えるのか・・・

ブログ始まり（前書き）

やっちゃまった感、リミットブレイク限界突破！！
でも後悔してません！！

一部変更しました

プロローグ始まり

朝6時30分に俺、防人裕也^{さきもりゆうや}は目覚ましの音で起床した

裕也「さてと、エリオとキャラの分の朝食を作らないとな」

俺は学校の、風見学園の制服に着替えてから自室を出て居間の右隣にある仏間に入って仏壇を開けた

裕也「おはよう、お父さんお母さん、そして美樹^{みぎ}」

仏壇に線香をつけてから俺は手を合わせて挨拶した

そこには2枚の写真があり、右の写真には俺の両親の防人幸也^{さきもりゆきや}と母親の防人彰子^{さきもりあきこ}の写真があり

左側には大体小学3年生くらいの女の子が映った写真が、名前は防人美樹^{さきもりみぎ}と言う

俺は仏壇を閉めて、台所に入り冷蔵庫を開けた

裕也「今日はスクランブルエッグにするか」

俺は冷蔵庫内から材料を散りだして手早く調理し、俺のを含めて3人分用意してから時間を確認した。

裕也「ふむ、7時10分かそろそろ2人を起こすか」

俺は2人が寝ている部屋に向かう

俺達3人が暮らしているのは共栄住宅のアパート、まあ所謂団地だ俺は”エリオとキャラの部屋”と書かれたドアを開けると

裕也「ほれ、エリオにキャラ、そろそろ起きろ、今日は2人とも日直なんだろ？」

と寝ている義息子と義娘をゆすって起こした

エリオ「うー、おはよう義父さん」

と赤い髪の毛をショートカットに切りそろえた男の子で名前はエリオ・モンディアルが眠そうに起きると

キャラ「おはようございます・・・」

2段ベッドの下で寝ていたピンク髪の小柄な女の子が髪の毛がぼさぼさの状態で起きた、名前はキャラ・ル・ルシェと言う

この2人は俺がとある理由から助けて引き取った子供で現在9歳で、風見小学校に通っている

裕也「ほれ、ご飯できてるから、顔洗って着替えろ」

2人「はい」

2人の返事を聞いてから俺は台所に戻った

2人が来たのはそれから約10分後だ

3人「「いただきます！」」

俺達は3人揃ってから朝食を食べ始めた

エリオ「ねえ、義父さん、今日はバイトあるの？」

エリオがお皿に盛られたスクランブルエッグを食べながら聞いてきた

裕也「ああ、だから今日は何時も通りにリンディさんのところで夕食だな」

リンディさんとはフルネームをリンディ・ハラオウンと言い両親が死んでから1番世話になってる人だ

同じアパートの上の階に住んでおり、俺がバイトで遅くなる場合は2人を預かってもらっている

2人「「わかった」」

そんな生活に慣れた2人は返事をしてくれた、・・・なんか申し訳ないな

そして朝食を食べ終わり食器を流しに浸けると

裕也「食器はそのままにしておけ、帰ったら洗うから」と俺は言い

裕也「そんじゃ、学校に行きますか」

2人「「うん！」」

2人は部屋にランドセルを取りに行った

俺達がすんでるアパートは風見学園にしても、風見小学校にしても距離がある

俺は既に昨夜用意しておいた指定カバンを持った時だった
ピンポンとチャイムが鳴り

？「裕也、時間だよ？」

とかわいらしい声が聞こえた

裕也「ああ、わかったよ!」

俺はドアの向こうに聞こえるように返事し

2人「準備完了!」

と言ってランドセル（エリオが青でキャロがピンク）を背負って玄関まで来た

俺は2人を確認すると

裕也「それじゃあ、行きますか」

と言ってドアを開けると

?「おはよう裕也」

と先ほどと同じくかわいらしい声の本人が目の前にいた

裕也「ああ、おはようフェイト」

目の前の少女は太陽が跳ね返るような金髪に赤い眼をした美少女と言える子で名前はフェイト・T・ハラオウンと言ひ俺の幼馴染だ

フェイト「エリオとキャロもおはよう」

とフェイトは俺の後ろに居た2人にも挨拶した

2人「おはようございます! フェイト義母さん!!」

義母さんというのはこの2人を引き取る際に俺だけでは無理だったのでフェイトに名前を貸してもらったのだ、だから名義上は俺とフェイトの子供と言うことになる

フェイト「うん、おはよう、あ、そうだ裕也、はいお母さんからお弁当だよ」

とフェイトは左手に持っていた青い包みのお弁当を俺にくれた

裕也「毎度ありがとうな、リンディさんにもお礼言っといてくれ」

フェイト「ううん、いいのお母さんは好きでやってるみたいだし」

俺は貰った弁当を持って

裕也「それじゃあ今日も1日元気に過ごしましょ!」

3人「「うん!（はい!）」」「」

こうして俺達の1日が始まった

ブログ始まり（後書き）

さてと作者の思いつきで始めました
がんばって書きますか

設定 (11月18日追加) (前書き)

今回は主人公と主なキャラの設定です

アリシアのデバイスの名前変えました

杉並と高坂まゆき、天枷美夏、高町なのは、ユーノ・スクライアを追加しました。

主人公の設定に追加アリ

設定（11月18日追加）

防人 裕也^{なほみちゆうや}、風見学園付属3年3組に所属している学生で身長は176cm

体は全体的に細いが痩せている訳ではなくかなり鍛えられている、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエを養子として引き取っていて育てている、生計は両親の遺産とバイトとある仕事でまかなっている

髪は黒く後ろだけ背中位まで伸ばしておりそれをヘアバンドで纏めている

顔立ちは丹精だが左目に傷と、と”ある物”を隠すための眼帯を着けている、右目の瞳の色は黒

同じアパートにはクラスメイトの沢井 麻耶^{さわいまや}と幼馴染のフェイト・T・ハラオウンと先輩の高坂まゆき^{こうさか}が住んでいる

使用デバイスはインテリジェンスデバイスの阿修羅^{あしゅら}、モードは高機動を主体に近接格闘戦と近接戦闘、遠距離戦闘が可能なオールラウンダー、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは両肩に侍の肩当と両手と両足に侍の鎧のような手甲と脚甲を装備しておりそれ以外は制服そのままの格好になっている

本人が使う魔法はミッドミチルダと古代ベルカと本人の家のためか特殊な陰陽術、及び西洋魔法を使う、更に本人の空間魔法で複数の日本刀^{レフスキル}を所持・封印している

希少技能、魔力の全属性変換資質

フェイト・T・ハラオウン、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は太陽の光が跳ね返るような金髪で瞳の色は赤、身長は一般的な

女子と同じ位でプロポーションはかなりのもの

双子の妹で姉にアリシア・T・ハラウンが居る

兄は名前はクロノ・ハラウン、風見学園の風紀委員で副委員長の役割を受け持っている

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのバルッディシユ・アサルト得意なのは主に高機動近接戦闘、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットはリリカルなのはを参照

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカレアスキル

希少技能、魔力の雷変換資質

桜内 義之、やぐらひよしゆき風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒でショートカット、瞳の色は少し茶色がかった黒

本人の意思とはまったく関係無しに風紀委員にブラックリスト入りされている

両親は不明、養母は風見学園の学園長の芳野さくらよしの

隣の家の朝倉家とは昔から家族同然に育っているために生徒会長の朝倉音姫には弟くんと呼ばれ、音姫の妹の朝倉由夢あさくらゆめには兄さんと呼ばれている

使用デバイスはインテリジェンスデバイスの桜花、おうか得意なのは高機動近接格闘と遠距離砲撃戦、カートリッジシステムを搭載

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカレアスキル

希少技能、未来予知（限定的）と魔力の桜の花びらへの変換資質と

お菓子（和菓子限定）の構成

アリシア・T・ハラウン風見学園付属3年3組に所属している学生

髪はフェイトと同じ金髪で瞳の色は水色

身長は一般的な身長でプロポーションは完璧

双子の姉で妹はフェイト・T・ハラウン

兄の名前はクロノ・ハラオウン

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのアテナ、得意なのは高機動近接戦闘と中距離砲撃戦闘、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは蒼い着物みたいなジャケット（イメージ的にはガンダムSEEDのラクスが着ていたもの）

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

レアスキル
希少技能魔力の雷への変換資質

すぎなみ
杉並、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒瞳の色も黒

身長は約171cm、運動神経抜群、頭脳明晰とかなりの能力を誇るが風見学園切つての問題児

非公式新聞部なる部活（？）に所属しており、イベントの度に何かしらの行動を起こす困った奴、しかも大抵が義之を巻き込む為、義之もブラックリスト入りされた。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのテストメント、得意なのは高機動近接格闘戦と遠距離砲撃戦闘でカートリッジシステムを搭載している。

バリアジャケットは黒い西洋鎧の身体の部分が無い状態で有るのは手甲と脚甲と肩当程度で背中には膝丈まである黒いマントが特徴

使用魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

レアスキル
希少技能魔力の闇への変換資質

こいつみか
高坂まゆき、風見学園本校2年3組に所属している学生

髪は藍色、眼の色は茶色

身長は161cmと女子にしては少し高い様子、運動神経が抜群で陸上部に所属しており得意なのは走り高跳びだが陸上競技全般で高い成績を保持している、尚生徒会副会長も兼任しており半ば杉並専門の追跡者となっている、尚義之、杉並、涉、杏、が同じクラスな

のは彼女が学年主任に提案したからである。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのエクスカリバー、得意なのは高機動近接格闘戦と中、近距離戦でカートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは白いジャージ状で身体の側面と正面に青い線が入っており、足には移動力強化のためか脚甲にローラースケートが着いている

使用魔法は主には近代ベルカだが時々ミッドミチルダも使用する

レアスキル
希少技能魔力の風属性への変換資質

あまかせみなつ
天枷美夏、風見学園2年1組に所属している学生

髪と眼の色は青で統一されている

何時も牛柄の帽子を被っており首には赤いマフラーを巻いている、人間ではなく2059年より約50年前に製造されたロボットのプロトタイプで本来は2059年に起きる予定ではなかったが、杉並と義之によりの偶然の行動（主には義之だが）により起動した、過去のとある理由により人間嫌いに陥っているが本来は優しく素直な子、義之たちを基本的には呼び捨てにしているが、ある理由により杏だけ先輩と慕っている。尚性能上どうしても8時間に1回バナナを食さねばならない、本人はバナナが嫌いと言語しているが本当は好き。

使用しているデバイスはかなり特殊なストレージデバイスのクロス（ギリシャ演劇のバックコーラスより）、本来はインテリジェンスデバイスだったが搭載予定だったAIのMIAKIというAIが何故かきちんと起動せず、まるで本来の主を待っているように沈黙を保っている。

美夏のAIとリンクするためある意味、美夏自身がインテリジェンスデバイスとも言える。

尚美夏には当時の技術では人工リンカーコアが再現できなかったため本来は魔法は使えないが、クロスに特殊なシステムが搭載されて

おり周囲の魔力を吸収して魔法を使用できるようにした。

バリアジャケットはなのは本編のナンバーズと同じようなインナーが展開され、その上に白いジャンパーと白い半ズボンを纏い手と足に肘と膝まで覆うような手甲と脚甲が展開する、尚脚甲の足首部分には紺色の6角形の宝石状の物体が埋まっており「ウィング・ロード」が使用できる、のと脚甲にはローラーが着いている

両手甲の部分には左右3つずつ小さい珠が埋まっており美夏本人が視認した魔法を左右3つずつ、合わせて6個ストックできるし、1度見た魔法は構築に時間が掛かるが構築可能

尚更に特殊なシステムでカートリッジシステムが搭載されており、ストックした魔法を本来魔力を圧縮する薬莢に圧縮して保存することが可能になっていて、圧縮した魔法により色が違い見間違えないように薬莢の側面には魔法の名前が記載される、尚圧縮するための薬莢を入れる場所は手首の部分に3発ずつ入れる事が可能で、発動するためには薬莢を手首から外して肘の内側の穴に入れる必要がある。

更にフルにストックした魔法を使用及び圧縮しないで新しくストックしようとした場合古くストックした魔法から消えていく

得意レンジ無し、あえて言うならば魔法を構築する時間が稼げる遠距離が得意、しかしあまり遠すぎると視認できなくなるためどうしても近づく必要がある

得意魔法及び希少技能無し

たかまち

高町なのは、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は栗色で眼の色は黒に近い灰色

身長は平均的

明るい性格で不屈の心を持っており、通称「エース・オブ・エース」と呼ばれている

因みに”悪魔”や”魔王”、”冥王”等と呼ばれるときれて言葉が片言になる

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのレイジングハ
ート・エクセリオン

バリアジャケットはなのは本編を参照
カートリッジシステムを搭載している

得意なのは中距離と遠距離砲撃と超遠距離精密砲撃で他のキャラに
比べると機動力は劣るが防御力が高い

使用魔法はミッドミチルダのみ

レアスキル
希少技能無し 追記魔力の総量は事実上測定不能状態らしい

ユーノ・スクライア、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は金髪で眼は緑色

身長は170cmくらい

優しい性格で押しに弱いが成績はトップクラス

尚付属生でありながら名誉図書委員と言う肩書きを得ており、理由
としては本校と付属にある2つの図書館の膨大な蔵書中から指定さ
れた本を1発で発見できる特殊な検索魔法を有しているから

変身魔法でフェレットにもなれる

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのハイペリオン、
カートリッジシステムを搭載している

高機動中距離と同遠距離砲撃が得意

バリアジャケットは西洋騎士の軽装鎧で色は白と青のツートンカラ
ーで左手に大きさが変更できる楯を保持している

使用魔法はミッドミチルダのみ

レアスキル
希少技能無し

設定 (11月18日追加) (後書き)

この設定はちよくちよく更新します

騒がしい朝の風景（前書き）

裕也「さてと義之は起きてるかな？」

騒がしい朝の風景

フェイト「今日も義之のところに行くの？」

フェイトが曲がり角のところで聞いてきた（エリオとキャロとは既に別れている）

裕也「ああ、まあ恐らく既になのはか由夢ちゃんか音姫さんが行ってるだろうけどな」

今言った3人は義之こと桜内義之の幼馴染だ

特に由夢と音姫の2人は兄妹同然に育った仲だ

そんなこんな言ってる内に義之の家の前に到着したら

由夢「兄さんいい加減に起きてください！」

という声が聞こえた

裕也「おーおーやってるね」

フェイト「裕也そんな暢気に言ってるいいの？」

と言った瞬間だった

なのは「由夢ちゃんどいて！」

裕也「ん？」

フェイト「なのは？」

やっぱりなのはも居たようだ

由夢「ちょ！？」 なのは先輩それは流石にマズい！！」

由夢よ少し言葉づかいが怪しくなってるぞ

なのは「全力全開！ デイバイン・バスターー！！」

と聞こえた瞬間桜色の光が義之の部屋の2階の窓を埋め尽くした

義之「ギャーーーーー！！」

義之の悲鳴が！！

裕也「・・・・・・・・」

フェイト「・・・・・・・・なのは」

俺は唾然としてフェイトは米神を押さえながら唸るしか出来なかった



10数分後

義之「なのは！ お前は俺を殺す気か！」

俺達は学校に向けて走っていた

なのは「素直に起きない義之君が悪いんだよーだ」

フェイト「いやだからってディバイン・バスターはやりすぎだよ、
なのは」

なのは「起きたんだから結果オーライ！」

裕也「それで殺されかけたんじゃないぞ」

と言ってるうちに

由夢「ここまで来れば大丈夫ですね」

着いたのは桜公園だった

ここ桜公園は1年中桜が咲く初音島でも1番桜の木が植えられている場所だ

清掃業者曰く「ここがあれば俺たちは安泰だ」らしい

何でかと言うと桜の花びらの回収だけでも1年中暇が無いからだ
因みに今の季節は冬だ、季節感もへったくれもない

と歩いていると校門が見えたが

義之「なんか騒がしいな」

なのは「だね」

そう学校のほうがなんか騒がしいのだ

？「はっはっは！ 捕まえてごらんなさーい！」

その原因は今分かったが

裕也「杉並か・・・」

義之「あいつはまた・・・」

杉並とは学園に存在する非公式新聞部なる団体を率いているいろいろトラブルを起こして本人曰くイベントを面白くしている困った奴だ
フェイト「どうする裕也？」

裕也「行くか一応俺達も非常要員とはいえ生徒会なんだ」

フェイト「わかった」

俺たちはカバンを開けて中から生徒会を示す腕章を取り出して右腕につけた

フェイト「じゃあなのはカバンお願いね」

裕也「義之頼んだ」

俺とフェイトはカバンと弁当を預けると走り出した

？「杉並ー待てー！」

フェイト「まゆき先輩！」

裕也「援護に来ました！」

まゆきとは本名、高坂まゆきこうさかといい生徒会副会長であり風紀委員会の委員長でもある通称生徒会長の懐刀だ、因みに会長は音姫さんだ裕也「ってデバイス展開してるし」

杉並「ちい剣使い《ソードダンサー》に優しい閃光が来たか！」

杉並は既にインテリジェンスデバイスのテストメントを展開していた黒い装甲に黒いマント手には短刀型のアームドデバイスを持っていた因みに剣使いに優しい閃光とは俺とフェイトの渾名だ

裕也「仕方ない、阿修羅セットアップ！」

俺は右手首の腕輪を前に突き出しながら言った

阿修羅＜承知！＞

フェイト「バルディッシュ！ セットアップ！！」

フェイトは黄色の三角形のペンダントを手の上に乗せながら言ったバルディッシュ＜イエス・サー＞

次の瞬間には俺たちはバリアジャケットに包まれていた（詳細は設定をご参照ください）

俺の両手には刀型のアームドデバイスが2本あり、フェイトは右手に鎌を彷彿させる杖を持っていた

まゆき「準備完了したら突撃！行くよエクスカリバー！」

エクスカリバー＜了解＞

エクスカリバーはまゆき先輩のインテリジェンスデバイスで待機形

態はネックレスの白い宝石状で展開すると両刃の大剣になるバリアジャケットは白を基調として青いラインが入ったジャージとマントと手甲だ

裕也&フェイト「了解!!」

俺達が突撃すると

?「あかん! フェイトちゃんに裕也君まで来たんか!」?

この声は……

フェイト「はやてまで……」

はやてこと、八神^{やがみ}はやてがそこに居た

既にはやてはリイン?とユニゾンした姿になっていた(詳細はなのは本編を参照)

杉並「同志八神よ撤退だ!」

はやて「了解や!」

と2人が逃走しようとしたとき

?「ウイング・ロード!」

と聞こえて青と白の帯状の道が逃走する2人まで伸びた

フェイト「これは」

裕也「スバルにGINGAさんか!」

スバルとGINGAとは風紀委員会に姉妹で所属している本名はスバル・ナカジマとGINGA・ナカジマと言う

2人も既にバリアジャケットを展開して身にまとっている(詳細は本編を参照)

スバル「裕也先輩にフェイト先輩おはようございます!!」

スバルは相変わらず元気だ

GINGA「裕也君にフェイトさんおはようございます」

裕也&フェイト「おはようございます!!」

俺達が挨拶すると

なのは「うわー」

義之「派手にやってるなー」

由夢「本当ですね……」

どうやら歩いていた義之たちが来たようだと義之たちの方向を見た杉並が

杉並「むう！ 風見学園の白い魔王が来たか！！」

杉並となのは以外「「「あ」「」「」」

言ってしまったなあ馬鹿・・・

なのは「・・・・・・イマナンテイッタ？」

終わった！ なのはの背後から黒いオーラが見える！！

裕也「総員退避ー！！」

俺は全力で叫びながら全速力で杉並たちから離れた

なのは「スコシアタマヒヤソッカ？」

なのははそう言いながらバリアジャケットを纏いとある魔法の準備を始めた

はやて「ちょ！？ ウチまで巻き込みかいな！！」

裕也「ちい！ 間に合わないな！！ フェイト、スバル、ギンガさんこっちに！！」

俺は両手に持っていたアームドデバイスを腰に装着すると右手を左の腰の辺りにもっていき

裕也「来い！ 千歳の輩雷切！」

俺の手には帯電した刀が握られていた

裕也「間に合え！」

俺は雷切を地面に突き刺して呪文を唱えた

裕也「五雷神君の奉勅、五雷神君の天心下り、十五雷の正法を生ず

！ 邪怪禁呪、悪業成す精魅、天地万物の理をもちて微塵と成す！

！ 十五雷正法十二散、禁！」

雷切から凄い雷が走りそれが俺達を囲む壁になった瞬間だったなのは「全力全壊！ スターライト・ブレイカーー！！！」

はやて&杉並「「ギャー！！！！」」

杉並とはやての悲鳴が響いた、って！ 学校の校舎になのはのスターライトブレイカーが！！

音姫「アイギス！！」

どうやら学校の校舎は音姫さんが自身のインテリジェンスデバイスのアイギスで護ったようだ

そして閃光が収まるとグラウンドは死屍累々の状況でクレーターが出来ておりクレーターの真ん中にははやてだけが倒れていた

裕也「杉並には逃げられたか・・・」

俺はため息をつきながら言った

裕也「皆無事か？」

俺は後ろにいた全員と腕に抱えていたフェイトに聞いた

フェイト以外「私は大丈夫ですが、フェイトさんが・・・」

裕也「へ？」

俺は腕の中にいたフェイトを見た

フェイト「・・・・・・・・（顔真っ赤）」

フェイトが顔を真っ赤にして固まっていた

裕也「おわ！？ フェイト！！！？」

俺はフェイトを揺さぶったが反応は返ってこなかった

こうして俺達の1日は始まったのだった

騒がしい朝の風景（後書き）

裕也「フェイト、大丈夫か？」

フェイト（まだ顔を赤くしながら）「うん、大丈夫・・・」

名前と能力募集（前書き）

今回は募集です

名前と能力募集

此度は私、京^{けい}勇^{ゆう}樹^きの力量不足（？）とイメージ不足により天^{あま}枷^{かせ}美^み夏^{なつ}とエリカ・ムラサキ両名のデバイス名と能力が決められないので皆様に募集させていただきます

使用者

デバイス名

バリアジャケットの形の詳細（武器か杖の形含めて）

使用魔法

得意レンジ

カートリッジシステムの有無

インテリジェンスデバイスなのかどうかも書いてください！

あるなら変形時の形とパターン数

を書いて応募ください！

皆様この哀れな作者をヨロシクお願いします！！

応募待ってます！

名前と能力募集（後書き）

作者「お願いします！ors」

裕也「この哀れな作者をお助けください

」

選択 前編（前書き）

裕也「今日の沢井はなんか迫力あるな」
フェイト「あれが決まってるからだよ」

選択 前編

裕也 side

ロングホームルーム

俺たちは今、LHR、まあ平たく言えば委員会決めとかのあれをやっていた

麻耶「皆さんもご存知の通り、来週の23日から25日までの3日間」

教室の1番前の教卓にわれらが委員長さわいまやの沢井麻耶が立っている

と鈍い音が聞こえたので左後ろを見ると、先ほどまで居眠りしていた義之が顔を机に打ち付けていた

麻耶「我が校でクリスマスパーティーが催されます」

義之は状況を確認するためか周囲を見回している

麻耶「クリスマスパーティーですが、言ってしまうえば文化祭と変わリません。各クラスでの催し物が義務付けられています」

どうやら義之は状況を把握したのかももう1回寝ようとしたら

麻耶「しかあし！」

と沢井が教卓を強打したので、びっくりして起きた

義之「うわっ、ビックリした」

アホか

前では沢井がギリギリと忌々しそうに握りこぶしを作りながら俺達を睨んでいた

義之は怖いのか少し背中が反っている

麻耶「残念なことに、私達のクラスの出し物は未だ、何も決まっていますせん！」

そうなんだよね

麻耶「この議題、LHRで11月からしているのにもかかわらず」

俺達だけじゃね？

杉並「さくらい桜内、桜内」

どうやら義之の左斜め後ろに座っている杉並が声をかけたようだが

義之「ん？」

義之は視線だけを動かして聞いたらしい

杉並「今日の委員長いつにも増して殺気だっている。居眠りしているとそのまま永眠させられるぞ」

それは流石に言いすぎでは？

？「マツチ棒かなんかで、まぶした瞼支えとけ」

と言ったのは義之の後ろに座っている男子で名前はいたばしわたる板橋渉という
ってか普通持ってねーよ

義之「マツチ棒、持っていない」

当たり前だ

渉「じゃー、ほら。シャーペン」

眼が飛び出るぞ

義之「おー……、ってデカイわっ。眼球飛び出るわ」

杉並「くくくく」

ちなみにこいつらは3人でよくつるむため通称で悪ガキトリオだ
義之「……って言われてもなあ。いろいろ文化祭でやった感があるしなあ」

それはなぜかと言うと

杉並「ふむ。我が校はイベント好きだからな。まあ、それでこそ俺も張り合いがあると言うものだが」

そうこの学校、風見学園はイベントが盛りだくさんなのだ、普通の学校に比べて2倍近いのではなからうか？

と気付いたら杉並が懷から黒皮製の手帳を取り出していた

義之「なんだそれ」

杉並「ネタ帳だ」

義之「お笑い芸人か、お前は」

確かに

渉「俺も手帳、持ってるぜ」

と渉が制服のポケットから手帳を出したが……

義之「ふーん……って、なんで表紙にプリントシールばっか貼っ

てんだよ、女子かお前は！」

所謂プリクラ帳か

渉「可愛いだろ」

いや、むしろ

義之「きもい」

うむ

渉「うわ、きもいはちょっとひどくね？ お前はもっと俺に優しく

するべきだ！！」

いやお前の扱いはそれで十分だ

義之「お前こそ、もっと環境に優しくなれ」

うむ

渉「か、環境だあ？ お、俺は環境を汚染してるのかよ……」

まあお前だけが原因ではないが

杉並「環境だけではない。今や板橋は地球規模で汚染存在だ」

言い切ったよおい

渉「うわあああ、許してくれ、地球っ！ ってか俺ってすごくね？」

アホのな

麻耶「ちよっと、その悪の根源3人組！」

確かに

沢井は義之たちをズビシッと指で指していた

麻耶「ちゃんと会議に参加しないと、あんたたちに決めてもらうからね」

まあここまで遅れた理由の大半が義之たちが原因だしな

義之「悪の根源3人組って、俺も入ってるの？」

なにを今更

麻耶「当たり前でしょう。ふたりがボケで、あんたがツツコミ」

まあ妥当だ

義之「いつの間にそんな役割が……。心外だ」

最初からだよ

杉並「では、いっそのこと3人ともボケということはどうだ？」

は？

渉「そうだな。新しい世界が拓けるかもな」

おいおい、それじゃあ

義之「收拾つかんだろーが」

その通りだ

と気付いたら静まっていた教室が騒がしい

どうやら義之たちの漫才で沸騰したようだ

沢井が今にも3人をぶちのめさんとばかりに睨んでいる

麻耶「静かに！！」

と沢井が手を叩いた

麻耶「今、決まらないなら、放課後決まるまで残ってもらうけど」

それは困る

どうやら全員同じ思いだったのか一気に静まった

義之「でも、なにをしたらいいのか、ぜんっぜん思いつかーん」

と義之が即効で断念した

まあ確かに俺もない

？「人形劇」

と静かな教室に抑揚のない声が聞こえた

声のほうを見るとそこに居たのは

見た目が人形みたいな小柄な女子の雪村杏だゆきむらあんずった

因みに席は義之の左隣で窓に接している

こいつは人形みたいに小柄で可愛いんだが表情が乏しいので思考が分からないし、何より、時折吐き出す毒舌が凄まじいのだ、しかしなんでも雪村流絶対暗記術とかを身につけているとかでとにかく頭は良い

杏「人形劇はどうかしら？」

とまた言った

教室内から「なるほど」やら「それもありか」と聞こえてきた

杏「せっかくクリスマスなんだし、ファンタジーっぽい出し物なら文句、ないでしょ？」

ふむ

麻耶「なるほど」

と教卓に居た沢井が頷いた

すると義之の前の女子が手を挙げた、その人物は杏と仲の良い花咲はなさき茜だあかね

茜「はい。私も人形劇がいいと思いまーす♪、クリスマスだし。

こう、ロマンチックな物語とかがいいんじゃないかなあ？ 聖なる

夜を盛り上げるラブロマンスとかー」

と爆乳で豊満なボディをくねらせながら言っている、恐らく男子の票をお得意の色香で誘ってるんだろ

まあ確かに季節柄ロマンスものには一理あるが

と色香に誘われた男子が次々に手を挙げた

渉「俺も賛成だー」

お前もか、ブルー〇ス

義之は落胆している

まあそれも仕方ないな杏と茜が結託して意見を出すときは何かしら企てている場合が多い

まあそれは杉並、義之、渉も一緒だが、……いや義之は巻き込まれてるだけか？

そして女子2人と義之たちは仲がいいのだ

む？ バランスが悪いって？ 安心しろ女子にはもう1人居るから

杏「ついでに提案なんだけど……人形劇のヒロイン役は、小恋ここ・
・なんてどうかしら」

杏が1人の女子の名前を出したとたん椅子が派手にこけた音が教室に響いた

クラスメイト全員の視線が音源に向けられた

小恋「あい……たたたた」

と椅子ごとこけた小柄だが胸が大きいちょこんと出たアホ毛が特徴の女子が椅子を直しつつ、ぶつけたんだろうお尻をさすりながら立ち上がった

小恋「え、な、なに言い出すの、急に」

今椅子に座ったのが月島小恋（つきのしまここ）といい、仲良し組みの最後の1人だ
因みに3人の名前の頭文字をそれぞれ取って通称、雪月花（せつげつか）と呼ばれ
ている仲良しメンバーだ

補足だが義之とは小学校からの付き合いで、所謂幼馴染だ、俺達全
員で仲良し12人組み（俺とフェイトとアリシアとなのはとユーノ
及びはやて含めて）ってわけだ（時々俺が居ていいのかとも思うが）
気付くと義之がうな垂れている

小恋「あの、あの、あの」

小恋は顔を赤くしながら戸惑っている

まあ雪月花の中では1番まともなんよねこいつ

性格よし、顔もよしでクラス内ではくクラス内1番の良心と言わ
れるほど人気があり、まあヒロイン役に抜擢されても誰も反論しな
いだろう・・・本人以外は

小恋「そんなのできないよ」
な？

杏「大丈夫」

茜「うんうん。小恋ちゃんならできるって」

小恋「な、何を根拠にそんな」

麻耶「ラブロマンスにするなら、相手が必要ね」

・・・なるほどね2人の企みが分かったよ

杏がフフと笑いながら

杏「・・・相手役は義之で決まりでしょ」

茜「賛成です。相手役は義之くんがいーと思いまーす！」

やっぱり

義之「はえ？」

なにアホな声を出してるんだよ

クラスメイトの視線が義之に集中した

涉「うお、マジかよ。俺じゃねーの？」

いやお前は論外

茜「だめだよお。義之くんっていい声してるし、演技もうまいんだから」

義之「俺がいつ演技をしたんだ？」

それはお前あれだろ

杏「仮病で学校を休んだ時」

義之「ぐっ」

そうなのだ、義之の奴ゲームをやりたいからって仮病で学校を休んだ方がいいが、電話越しにやった熱にうなされた声があまりにも迫真の演技だったために先生が救急車を手配してしまったのだ、おかげで義之は救急車に乗せられて病院に運ばれて先生が来る直前に脱走、結果、仮病とバレて大目玉を受けた

義之「いやー、あのときはさすがに焦った。危ない、危ない」

麻耶「照れながら言ってる場合じゃないでしょ！」
まったくだ

茜「と、いうわけで、どうかなあ？ 小恋ちゃんの相手役は義之くんってことで」

杏「特に問題はないと思うけど・・・」

小恋「ちょ、ちょっと待って！ そんなの無理、無理！ 義之がそんなのするわけないよ。あの義之だよ？」

お前さん本人の前で言うか

まあ実際義之がこういった催し物にまじめに取り組んだ覚えは無いからな、確かに頷けるが

因みに小恋は赤い顔を更に紅潮させつつ、義之を上目遣いに見ている麻耶「ふむ。そうね・・・悪の根源の1人を催し物の重要な役割にすれば、悪さも半減するか」

義之「えー。俺ってすんごいマジメで、すんごいい人なのに。公園のゴミとか拾うのに」

説得力0だ

麻耶「黙りなさい、このさわやかヤクザ」

新しい！？

義之「さ、さわやかヤクザって何？」

確かに

涉「さわやかな笑顔を浮かべつつ、相手をボコ殴りにする人」
なるほど？

義之「そ、そんなイメージなの？ 俺って・・・」

ドンマイ

杉並「・・・お化け屋敷か」

義之「は？」

杉並が今までの発言を完璧に無視して言った

杉並「ふむ、お化け屋敷。なるほど、催し物をお化け屋敷にすれば・・・、ここをこうしてと、そうだなアレは科学部の連中から拝借するとして・・・うん、これならばあの計画も・・・」

杉並が黒皮の手帳を見ながら何かぶつぶつと呟いている

義之「お、おいおい・・・今の話聞いてたか？」

義之がなにか勝手に決め込んでいる杉並に聞いた

杉並「聞いていた。月島とお前が人形劇を通じて、不毛な疑似恋愛をするという話だろう？」

義之「なんだか身もふたもない言い方だな。っていうかクリスマスにお化け屋敷？」

まあ確かにあれはむしろ夏では？

杉並「季節など関係ない。真冬でも桜が満開のこの島で何を躊躇うためらことがあるだろう、要は気になるあの子を誘って、暗闇で告白できる！ 2人の密着度、MAX！ そんなスーバラシーお化け屋敷を作ることには何の異論があると言うのだ！」

と杉並の口上に男子の野太い歓声が挙がった。

その中には渉まで居た・・・どっちだよ

しかし杉並が色恋沙汰に手を貸すような言動をとるか？

こいつは色恋沙汰よりもUMユーマAとか埋蔵金とかUFユーフォーOとかのオカルト方面にしか反応しないはず、一体何を？

義之「何を企んでやる」

義之が俺の気持ちを代弁してくれた

杉並「やだ、なんのこと？」

義之「なんだ、てめえ。その汚れを知らない天使のようなおとぼけ顔はー！」

胡散臭すぎる

麻耶「はいはい、静かにー！ 杉並。その意見を出したっていうことは、あんたが責任者になってくれる。そう解釈しても構わないのね？」

沢井が騒いでいる男子を黙らせて杉並に聞いた

杉並「ふふふ。ホラーハウスのオーナーとでも呼んでくれたまえ」

麻耶「あ、そう」

沢井は杉並の言葉を受け流した

麻耶「どのみち生徒会から目をつけられるだろうけど、でも、もう時間もないし、人形劇をやるにして、物語とか、具体的なイメージはあるの？」

沢井はずり落ちた眼鏡を直しながら杏たちに聞いた

茜「ロマンチックに、夢見るように♪」

麻耶「抽象的ね・・・」

杏「既にシナリオ構成は出来てるわ」

そういや杏は演劇部だったな

麻耶「なるほど。では、今2つの意見が出たわけだけど、他にはない？」

クラスの皆は人形劇かお化け屋敷で盛り上がっていた

人形劇がほとんど女子で、お化け屋敷がほとんど男子だ

因みに人形劇の場合ヒロインと主役は小恋と義之で既に決まっている、それと小恋は音楽が得意だから（軽音楽部所属）ついでに音楽決め役にも決まったようだ

因みに小恋は困った表情をしながらお化け屋敷と言っている（チラチラと義之を見ながら）

茜「ね。義之くんはどっちがいいの？」

茜が義之の顔を覗きながら聞いている

義之「どっちでもいいけど、人形劇だったら、ちょっと大変かな」

杏「大丈夫よ。義之のセリフ、少なくするから」

義之「ホントかよ」

杏「覚える気ないだろうし・・・」

ごもつとも

義之「そ、そんなことないけどさ」

説得力0だ

杏「時間もあまりないから」

杉並「いやいやいや。すまないお嬢さん方。桜内の心は既にお化け屋敷で固まっている」

と杉並が義之の肩に手を回しながら言った

渉「俺もお化け屋敷で賛成だな」

茜「渉くん、さっき人形劇に賛成だったじゃない」

確かに

渉「えー。だって暗闇でドッキリだぜー？ なぁ月島」

小恋「え？ あ、そ、そうだよ。うんうん」

と、いきなり話を振られた小恋は焦りながら答えている

渉「ほらー。月島だって、ああ言ってるじゃん」

茜「小恋ちゃんまで」

小恋「だ、だって、わたし、ヒロインなんて出来ないもん」

小恋の自信なさげな言葉に杏と茜、顔見合わせたよ

渉「暗闇でドッキリ・・・ああ。なんて魅惑的な言葉なんだ！ 俺、

絶対ドッキリしたい！ ドッキリついでに、あんなこととか、こん

なこととか！ だあああ、もう心臓バクバクー！」

義之「落ち着け、ドッキリしすぎだ」

義之が暴走し始めた渉を嗜めている

麻耶「んもう！ 静かにしなさいーい！！ まったく何度言わせたら気が済むの！？」

沢井が教卓を叩きながら叫んだ

杏「委員長、落ち着いた方がいいわ……。あなたがこの議題で『静かにしなさい』って言ったのは、11月から数えて41回よ」
よく覚えてるね

麻耶「誰も数なんて聞いてないでしょ！」

杏「ちなみに、教卓を叩いたのは11月から28回……。深呼吸が必要だと思うわ」

麻耶「く、くだらないこと覚えてないで、静かにしてよね。」

で結果多数決にもつれ込んだが、このクラスの人数は奇数だ
で現在半々に分かれた、最後の1人は義之だ、さてどちらを選ぶかな？

麻耶「桜内……」

義之「え、え？」

沢井が呆けていた義之に聞いた

麻耶「早く決めてくれない？ あんたで最後なんだけど」

義之「はれ？」

お前気付いてなかったな

杉並「ふっ、わかっているな同志よ」

義之「う」

杏「……」

義之「え、えと」

困ってるな

さてどうする？ 親友よ

選択 前編（後書き）

裕也「なんか面白そうな予感」
フェイト「え？」

選択 後編（前書き）

裕也「どうなるかな？」

選択 後編

裕也 side

義之「それ以外がいいなあ……」

なんですと？

義之はしばらく黙考した挙句そう言ったのだ

麻耶「はあ？」

沢井が怪訝そうな眼で義之を睨んだ

義之「どうせだったら、もっと違うやつにしないか？」

義之お前……

麻耶「あのねえ、桜内……、今更なに言ってるわけ？ 多数決

なのよ。あと1票で決まるのに、まぜっかえさないでよね！」

裕也「沢井よ落ち着け」

俺は義之の言葉で案の定で怒った沢井をなだめた

杏「何か具体的な案があるわけ？」

雪村流暗記術で先ほど義之が言った「何も思いつかない」宣言を忘れていない杏が義之にたずねた

義之「んー。具体的なものがあるわけじゃないけどさ、せっかくのクリパなんだし、もっと盛り上がるものはないのかなーと思って」

裕也「なるほどね、要するに刺激が足りないわけか……」

義之「その通り」

確かに今出ている2つは何処のクラスでもやっていて新しさはないからな

杏「まあ、ある意味具体的ね」

麻耶「具体的なのは方向性だけでしょ？ 何をするかは全然具体的

じゃないじゃない」

茜「まあ、ある意味義之くんらしいよね」

小恋「うん……」

はやて「そうやね」

裕也「ああ」

フェイト「だね」

俺たちは慣れているから義之を見た

麻耶「杉並、あんたからも何か言ってやんなさいよ。あんたたちの案じゃ、不満なんだってよ？」

杉並「ふふん……。面白そうなので、しばらく傍観させてもらう」

麻耶「はあ？」

沢井が信じられないと杉並を見ている

杏「こういうとき、義之にまかせておくと、話がとんでもない方向へ流れることがあるもんね……」

杉並「そういうことだ。今年の体育祭然り、文化祭然り……」
裕也「ああ、こういうときの義之は面白いことをやってくれるからな」

フェイト「はあ、裕也が乗っちゃった」

はやて「まあまあ、フェイトちゃん」

アリシア「そうだよフェイト楽しまなくちゃ♪」

そう言ったのはフェイトの前の席に座っている（俺の右斜め前）アリシア・T・ハラオウン、フェイトの双子のお姉さんだ、フェイトとは見た目がほとんど一緒だが唯一違うのは眼の色くらいで、フェイトは赤に対してアリシアは水色だ

麻耶「とんでもない方向に流れてもらっちゃ困るのよ、春の卒業パーティーのときみたいなことになったらどうするの？」

と沢井が困りながら俺達に向けて言った

義之「杏、卒パでの出し物覚えてるか？」

えーと確か卒業パーティーでの杏と茜のクラスでの出し物は……（去年はクラスが別だった）

杏「セクシーパジャマパーティーのこと？ 当然よ。ね、茜」

茜「うん♪」

思い出した、こいつら寝巻き、要するにパジャマ姿で接客をしたの

だった

義之「そういう感じのはっちゃけ具合が欲しいんだよ」

裕也「なるほどね」

杏「もう1回やってもいいけど？」

杏が小悪魔的な笑みを浮かべながら言った瞬間

涉「マジですか!？」

涉が飛びついてきた

義之「ん、それはちよつと・・・」

涉「なんだよ! 今年のクラスでやれば、杏や茜だけじゃなくて、

月島のパジャマも見れんだろおが」

涉が自分の欲望^{エロス}に忠実に叫ぶと

麻耶「板橋・・・」

沢井が涉をギロリと睨んだ

涉「あ、あといいんちよのパジャマ姿も・・・」

涉よそう取ってつけたように言ったら傷つくだけだが

麻耶「・・・はあ」

裕也「まあ、なんだお疲れ・・・」

俺は気休めかもしれんが労わりの言葉を送った

杏「義之は、セクシーパジャマパーティーじゃ不満なの？」

義之「別に不服ってわけじゃないけど、それじゃ、卒パの二番煎じ

になっちまうだろ？」

杏「いいものは何回やつても、いいものよ」

義之「そうかも知れないけど、インパクトをもうちよつとねえ・・・

」

茜「インパクトねえ・・・」

なのは「インパクト・・・」

ユ一ノ「インパクトか・・・」

気付いたら俺たちはクラスで一丸となって考えていた

小恋「あ、あれは？」

義之「何？」

俺達は小恋を見た

小恋「わたしたちのクラスでは、焼きおにぎり屋さんだったじゃない、あれならインパクト、あるんじゃない？」

義之「焼きおにぎりか……」

焼きおにぎり屋とは去年杏と茜と渉以外の居た俺達のクラスでやった出し物だ（途中からある理由で被害が続出したが）

これは『美少女が生の手で握ったおにぎり』を焼くという宣伝でやったのだ、しかも杉並の巧妙な情報操作により爆発的な勢いで売れたのだ

閑話休題

茜「つまり、パジャマパーティーで焼きおにぎりを作るってこと？」

麻耶「なんか二番煎じっぽいわね」

確かに

義之「でも、方向性としては悪くないと思うんだよ。どう思う？」

杉並

杉並「ふ、握って作られるのは、何も焼きおにぎりだけではあるまい……。なあ、委員長？」

む？ なぜに沢井に振ったんだ？

麻耶「え？ あ……」

沢井がなぜか表情を変えた。

どうやら、何か思いついたようだ

義之「思いついたか？」

クラス中の視線が沢井に集まった

麻耶「え？ あ、いや……ダメよ。そんなの……」

む？ 沢井にしては珍しく口ごもったな

渉「おいおい、発言する前から自分で否定してんじゃないぞ。ダメ

かどうか、言ってみなきやわかんね〜だろうが！」

裕也「渉にしては良い事言った」

渉「ヒドい！」

麻耶「え、え〜と・・・」

なぜか沢井は恥ずかしそうにしている

麻耶「・・・・・・・・・・」

しばらく言おうとしたりしなかったりを繰り返して沢井は視線を逸らしながら小声で呟いた

渉「聞こえね〜ぞ〜」

渉がもう1回催促したら

麻耶「お、お寿司って言ったのよ！」

裕也「なるほど、寿司か・・・・・・・・」

義之と杉並が視線を合わせた

杉並「光明が見えたな」

裕也「ああ、それだ！」

俺達は頷きあった

義之「行けるんじゃないか？　寿司屋なんて他所のクラスじゃ絶対

思いつかないぞ！」

クラスが一気に活気付いた瞬間だった

渉「セクシーパジャマパーティー、フィーチャリング寿司屋か。面

白そうだな、ん？　いやセクシーパジャマ寿司バーがいいかな・・・

・」

そんなもんでもいいわ！！

クラス中から「それだ！！」とか「面白そう！！」などなど聞こえてきた

杉並「ふっふっふ、タイトルはこれで決まりだ。『セクシー寿司パーティー』、コードネーム暗号名はSSP！！」

名前のインパクトと意味のわからなさ具合がいい感じに合致したSSPか・・・・。こりゃ、今年のクリパは寿司の旋風が巻き起こりそうだな

杏「ほらね、義之にまかせると、面白い方向に転がるでしょ？」

茜「うんうん。ホントだね」

はやて「さすがは義之くんや！」

なのは「にゃははは♪」

小恋「でも、いいのかなあ。こんなので・・・」

麻耶「ちょ、ちょっとちょっと、皆、何決まったような顔してるの？　そういう案が出たってだけの話でしょ？」

沢井が俺達を現実に取り戻そうとしているが

杉並「何を言うか、委員長。俺の中ではすでに決まったも同然だぞ」

麻耶「お化け屋敷はいいの？」

杉並「ふふん。企画は次回に持ち越しだな・・・」

はい、まずは逃げ道が半分無くなって

麻耶「に、人形劇は？」

一縷の希望に望むが

杏「シナリオの構想から練り直すわ・・・」

麻耶「・・・・・・・・・・」

はい、囲まれた！

クラスの雰囲気はSSP一色に染まる中、沢井だけが渋っていた

杉並「何をためらう必要があるのだ、委員長。寿司が食い放題なのだぞ」

麻耶「お、お寿司・・・」

そういえば沢井は寿司が好物だったな

これは決まったな。

義之の一言から始まって、ちょっとした考えから思わぬ方向に進んだみたいだが――

皆乗り気になったのでこれで決まったな

そして俺達の出し物が暗号名^{コードネーム}SSPこと『セクシー寿司パーティー』
に決まったのだった

選択 後編（後書き）

裕也「さすがは義之だ、期待を裏切らないな！」
フェイト「いいのかな、非常要員とはいえ生徒会役員なのに、しかも書類まで偽造して・・・」

新しい出会い（前書き）

裕也「さてとようやく昼飯か」
フェイト「裕也、ご飯食べよう？」

新しい出会い

義之 side

む、ようやく俺か・・・

俺は昼休みのチャイムと同時に背筋を伸ばした

義之「くあゝ」

と俺があくびをしたら

杉並「どうだ桜内。一緒にメシでも」

振り返ると、杉並がイヤライ笑みを浮かべて立っていた

義之「俺は別に構わんけど、渉はどうするよ？」

俺は机に突っ伏している渉に声をかけた

渉「あー、俺はパスパス。2人で蜜月の時間を楽しんできてくれ」

と渉は手をひらひらさせた、ってか嫌な言い方すんな

杉並「ふむ、それではふたりきりの甘いランチへしけこむとするか」

義之「気持ち悪いこと言うな」

一瞬鳥肌がたったじゃねーか

杏「なるほど、このカップリングはありかもね」

茜「だよねゝ。なんか色々といけない想像が・・・。ねえ、小恋ち

ゃん？」

小恋「ふえ！ な、なんでわたしに聞くの！？」

茜「だって小恋ちゃん、そういうの好きじゃない」

小恋「そんなことないよ」

杏「自分の欲求に素直になる。それが1番よ、小恋」

小恋「だ、だからゝ、違うってばゝ」

後ろのほうで勝手にキャッキヤと盛り上がってる雪月花3人組

アホか

義之「で、どこ行くよ？ 学食か？ 購買か？」

俺は杉並に問いただした

杉並「ふふふ・・・。まあ、黙ってついて来い。とっておきの場所

に招待しよう」

にやりと笑って、すたすたと教室を出た杉並

義之「しゃーねーな」

俺は杉並を追った

義之「で、どこまで行くんだよ？」

俺は上履きから靴に履き替えながら聞いた

杉並「なあに、ちよつとそこまでだ」

そう言った杉並の後を着いて行き

校門を出ていった

義之 side END

裕也 side

俺はフェイトと一緒に弁当を食べていた

裕也「ふむ、相変わらずリンディさんは料理上手だな」

俺はリンディさんが作った弁当を素直に賞賛していた

フェイト「（ボソリ）うーん、今度は私が作ってみようかな？」

裕也「なんか言ったか？」

フェイト「う、ううん！ 別に！！」

裕也「そ、そうか」

俺はフェイトの珍しく強い語気に少し驚いた

裕也「しかし、義之と杉並は一体どこに行ったんだか」

義之たちは昼休みが始まると同時に教室を去ったきりだ

とその時、ポケットの携帯が震えた

裕也「む？ 一体だれだ？」

俺は携帯を開いて画面を見た

裕也「水越先生？」

水越先生とは、本名を水越舞佳^{みずこしまいか}と言い、保健室の先生だが、本業は

天枷研究所の研究員なのだ

裕也「（ピ！）はい、防人です」

水越『あ、裕也君？ 今いい？』

裕也「はい、丁度弁当も食べ終わりましたし」

俺は携帯を肩で抑えながら、弁当を片付けていた

水越『よかった、ちょっと手伝ってほしいことがあるんだけど、いい？』

俺は時計を見た、ふむ、まだ時間的にも余裕があるな

裕也「はい、構いませんよ？」

水越『よかった、じゃあさ今から校門のところに来てくれる？』

裕也「分かりました、少し待ってください」

そう言っ俺は携帯を切った

フェイト「水越先生なんだって？」

フェイトが俺に聞いてきた

裕也「なんでも手伝ってほしいことがあるんだとよ、ちょっと行ってくる」

フェイト「うん、行ってらっしゃい」

俺は教室を出て校門に向かった

そして校門に着くと

水越「よし来たわね？」

そこにはタバコ（無着火）をくわえた白衣を纏った女性が居た、この女性が水越舞佳先生だ

裕也「どうしたんですか？」

俺は呼び出した用件を聞いた

水越「ん？ ちょっと立ち入り禁止の場所に誰かが入ったみたいでね、戦力が欲しいのよ」

裕也「なるほど、了解」

俺は了承した

水越「それじゃ着いてきて？」

俺は水越先生に着いて行った



桜公園を抜けて道なき道を歩き密林を越えたら俺の目の前に洞窟が見えた

裕也「ここは・・・」

水越「ここは”ある存在”を封印していたの、うーん、バリケードあった筈なんだけどな」

そう言いながら水越先生は洞窟内に入っていた

裕也 side END

義之 side

俺達の目の前には女の子が眠っているカプセルがあり、そして先ほど俺の膝がそのカプセルの横にあったスイッチを押してしまった。

すると洞窟内にピコンピコンと電子音が鳴り響いた

義之「どうするよ？」

杉並「ふむ。まあ、押してしまったものはしょうがない。なるようになるだろ」

義之「ずいぶん軽いな」

杉並「深刻になったところでどうしようもあるまい」

確かにね

義之「なんだと思う？　これ」

俺は指差しながら聞いた

杉並「さあな。まあ考えられるとすればー」

とその時電子音が止まった

義之「考えられるとすれば？」

杉並「こういうことだな」

俺は杉並の視線を追ってカプセル内の少女を見た

そして、ガツチリと視線が交錯した

義之「なるほどね」

予想通りの結末。

少女は俺を睨みつけていた。

そして何故か拳がプルプルと震えている

そして体を起こした。

しかも勢いよく

ゴーン！！

？「あがつ！！」

義之「・・・」

まあ、そうなるわな

杉並「・・・」

いい音が鳴り響いた。

おかげで神秘性が一瞬で吹っ飛んだよ

ガラスの蓋がビリビリと震えている

？「き、貴様っ！　謀ったな！！」

いや、なにも謀ってないです

義之「・・・てか俺のせいかな？」

杉並「ふむ、難しいところだな」

いや、どうみても俺のせいじゃないと思うんだけど。

と少女が中ではにかしらの操作をすると。

ウィーンとモーター音がしながら蓋が開いた

？「ちっ！」

少女は上半身を起こすと同時に盛大に舌打ちした
おでこが赤く染まっている

義之「あの、大丈夫ー」

？「貴様か？」

義之「な、なに？」

？「貴様が美夏を起動したのかと聞いている」

杉並「起動だと！？　　と言うことはもしやっ！」

杉並が驚きつつどうやらこの子の正体に気付いたようだ

？「部外者は黙っているっ！」

杉並を少女は鋭く一喝した

杉並「む、むう」

？「なぜ美夏を起動した？　　なにが目的だ？」

感情を抑え込んだ低い声。

明確に敵意を持った視線。

ぴんと空気が張り詰めていく。

いやゝ偶然ですゝ。

たまたま興味本位で洞窟に入り、屈んだ拍子に膝がぶつかって起動
しちゃいましたゝ。

そんなことを言ったら間違いなく殺されちゃいそうな雰囲気だ。

ここは慎重に言葉を選ばないとー

杉並「ふっ、ただの偶然だ。屈んだ拍子にこいつの膝が起動スイッチ
チを押したただけだ」

義之「バカかお前はっ！」

思わず叫んだ、って、声裏返ってるし

義之「なにをバカ正直にー」

？「・・・そうか。膝が・・・ね？」

俺もバカか！

後悔しても後の祭りだった

少女はゆっくりと身体を起こして、カプセルから降り立った。

？「・・・偶然に・・・だと？」

少女は伸びをしながら、首をこきこきと鳴らした。
そして身体を半身に構え、ぐっと拳を握り締めた。

？「・・・ふざけたことを」

ヤバイ！

義之「ちょ、ちょっと待ったあ！ 落ち着いて話そう、な？ な？」

？「人間風情と同じ時間を共有しなければならないと考えるだけで・

・・・虫唾が走る」

義之「そ、その、勝手に起動したことは謝るよ、ごめん。でも暴力
ではなにも解決しないと思うぞ、ほら、杉並もそう思うだろ？」

俺は一縷の希望に縋る思い（不本意だが）で杉並に声をかけた

杉並「すまない。部外者は黙っていないと怒られてしまうもんで、
その件に関してはノーコメントとさせてくれ」

こ、この野郎！！

？「覚えておけ。美夏はこの世界で嫌いなものが2つだけある、1
つはバナナ。そして、もう1つは・・・人間だ！」

ぐいぐいとにじり寄ってくる少女。

？「美夏はずっと眠っていたかったのだ。それを無理やりたたき起
こした挙句、偶然だと？ それで済まされると思っているのか。こ
れだから人間ってやつはっ！」

少女は大きく右拳を振り上げる。

いや、だから暴力はいけなくてえ！

？「食らえっ！」

風を切る音。

眼前に拳が迫った瞬間だった
ダン！

と音が聞こえて、拳が止められた後少女は押し倒されて、その首筋
に刃が当てられた

？「そこまでよ！」

鋭い声が響き渡った

？「な、なに！？」

？「俺の親友に手え出そうとは、いい度胸だな？ 死ぬか？」

？「どうやら間に合ったようね」

どこのどなたか知りませんが、ありがとうございます！

？「H M 1 A 0 6 型、ミナツね？」

俺は抑えてくれた人物と声の人物を見て驚いた

義之「裕也に水越先生！？」

それは保健室の水越舞佳先生と親友の裕也だった

水越先生の背後からは数人の屈強そうな男性達が俺達を包囲した

水越「あゝあ、あんたたちだったのね。こんなオイタしたのは。まったく」

水越先生は呆れたようにため息を吐いた

義之「す、すいません」

水越「ま、いいわ。裕也君そろそろ解放してくれる？」

裕也「・・・了解」

裕也は、押し倒していた少女の首筋から日本刀を離してから、少女を解放した

水越「で、お目覚めはどうか？ ミナツさん」

水越先生は身体を起こした少女に聞いた

？「聞くまでもないだろう。最悪だ！」

水越「ごめんなさいね。私達としてもあなたを起こすつもりはなかったの。でも、起きてしまったからには・・・」

水越先生が周囲に目配せすると包囲していた男性達が包囲を狭めて、裕也が刀を構えた

？「誰も逃げたりなんかしない」

水越「そう。素直で助かるわ、それじゃあ、連れて行って」

男「了解しました」

そして、少女を取り囲むように連れて行く

な、なんなんだこの状況は

洞穴の中に変なカプセルがあって、そこで女の子が眠っていて、ア

ルームが鳴ったと思ったたら裕也と水越先生がやってきて・・・。

H M ー A 0 6 型？ ミナツ？

頭が混乱してる

お、落ち着け。

とりあえず情報の整理をー

？「貴様たち、なんという名前だ？」

義之「へ？」

裕也「・・・なに？」

突然、話しかけられて思考が飛んだ

？「バカか貴様は。美夏は貴様達の名前を聞いているのだ」

義之「え、あ、あっと、桜内義之」

裕也「防人、防人裕也だ」

？「桜内に防人か、その名前、覚えておくからな」

ぎろりとひと睨みされる。

いや、覚えなくていいから

裕也「やれやれ」

そう言いながら裕也は刀を鞘に仕舞って、空間魔法で消した

そのまま少女は男達に連れて行かれた

水越「まったく、入り口の立て看板が見えなかった？ 立ち入り

禁止って、それに有刺鉄線を嚴重に張り巡らせといたはずだけど？」

杉並「いえ、俺達が来た時には有刺鉄線は切り取られていました。

立て看板には気がつきませんでした」

杉並がしれっと嘘を吐いた、裕也も気付いてるようで杉並を睨んで

いた

杉並「それよりもさっきの娘は？ H M ー A 0 6 型とか言っていた

ように聞こえましたが」

水越「はあ、しょうがないわね、彼女はロボットよ。H M ー A 0

6 型、開発コードはミナツ」

義之「ロボット！？」

俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。そのくらい驚きだった

裕也「なるほど、あの手ごたえはやはりそうだったか」

お前は気付いてたんか!？」

杉並「・・・ミナツ？」

水越「ええ、そうよ」

義之「いや、だってあんな感情豊かなロボットなんて」

確かに、最近のロボット技術はかなりの水準に達していると言っている。

現在市販されている『μ《ミュー》』というロボットを見たことがあるが、パツと見は確かに人間そっくりに見える。

しかし、あそこまで感情豊かに動いたりしゃべったりするロボットを、俺は知らなかった

杉並「うむ。確かにあそこまで見事に人間らしさを持ったロボットは見たことがないな」

裕也「ああ」

水越「あの子は特別なの。だからここで眠らせていたんだけどね、まったく、余計な仕事を増やしてくれて」

義之「すいません」

水越「そうね、悪いと思ってるんならひとつ仕事を手伝ってもらおうかな? 桜内義之くん」

義之「は、はい。俺にできることなら」

水越「うん。それじゃあ、後で放送で呼び出すからよろしくね、ということで、とっとと帰りなさい。授業はしまっちゃうわよ」

水越先生はこれでお終いとばかりにパンパンと手を叩いた

義之「はい、失礼します」

俺は水越先生に一礼して、歩き出す

水越「あ、そうそう、さっきの出来事は全部忘れなさい」

背中にかけられる声

静かに、鋭く。

水越「これはお願いじゃないから。この意味、わかるでしょ?」

杉並「もちろんです」

水越「うん、それならいいわ」

そして洞窟を出た

義之「結局なんだったんだよ？」

杉並「簡単なことだ、洞穴の中に最新鋭のロボが保管されていた。それをお前が起動してしまった」

義之「水越先生は？ どうしてここへ？」

杉並「さしずめ本職は研究所の職員ってことだろう。副職として教師をする。さして珍しいことでもない」
ま、そんなところだとは思うけどさ。

裕也「杉並正解な？」

やっぱり

杉並「それにしてもすばらしい体験だった。あそこまで生々しいロボを目の当たりに出来るとは」

思い出したように興奮気味に話す杉並

義之「確かにな、さてと、って、あーっ！っ！」

杉並「どうした？」

裕也「なにがあった？」

義之「時間だよ時間。授業開始まで後5分しかないじゃねーかよ！」

杉並「ああ。と言うことで少し走るぞ」

義之「ばか！ メシは！？」

杉並「あきらめるんだな。その分貴重な体験が出来たんだ。結果的にプラスだろ。」

裕也「それはお前だけだ」

義之「ふざけんな！ 俺のメシを返せ！」

杉並「別に俺が奪ったわけじゃないから、返したくても返せんな」
義之「くそ！ カロリーが足りてないんだよ！」

俺たちは少ないカロリー（裕也は別）を気にしながら学校まで走っ

た
の
だ
っ
た

新しい出会い（後書き）

裕也「疲れた・・・」
フェイト「大丈夫？」

天枷美夏のデバイスの決定（前書き）

裕也 「よかったな、決まって」
作者 「うむ、確かに」

天枷美夏のデバイスの決定

此度は私、京勇樹^{けいゆうき}の作品を読んでいただき誠にありがとうございます。

以前募集した天枷美夏とエリカ・ムラサキのデバイスのうち、天枷美夏のデバイスの能力と名前が決定いたしましたので、お知らせいたします。

決定いたしましたのは、碧^{みどり}さんがご応募してくださいました、デバイス名コロス（ギリシャ演劇のバックコーラスより）を採用いたしました。

詳細な設定とバリアジャケットの形状は後日設定に追加させていただきます。

尚まだエリカ・ムラサキのデバイスは決まってませんのでドシドシご応募お待ちしております。

それと、ご応募いただきました設定などは多少変更する場合もありますこともご了承くださいますようお願いいたします。

ここまでお付き合いいただき誠にありがとうございます、引き続き私、京勇樹の作品「D・C?」なのはstriker's漆黒と桜花の剣士」をお楽しみください。

天枷美夏のデバイスの決定（後書き）

美夏 「応募ありがとうな！ 美夏も嬉しいぞ！！」

ヘッドハンティング（前書き）

義之「さてとどうっすかな」

ヘッドハンティング

義之 side

義之「さてと、今日はどうすっかな」

ホームルームの終わり、放課後の校内。

今後の予定を考えながら、俺は廊下を歩いていたと、その時だった

まゆき「よっしゃ、弟くん発見」

と、聞きなれた、でもあまり嬉しくない声を後ろからかけられた。

まゆき「弟くん、今、暇？　ってか、もちろん暇よね」

ぐるりと回りこんで、俺の目の前に立つまゆき先輩。

義之「え、えっと・・・」

さっきは先輩から後光がさしているように見えたのに（何があったて？　聞くな）、今は悪魔の尻尾が見える気がする

まゆき「ん？　なにに？　あまり会いたくない人に会ってしまったて、どうやってこの場から逃げ出そうか考えてる顔をして」

うぐっ！　鋭いっ！

まゆき「ま、弟くんがそんなことを考えてるわけないけどね。ね、弟くん、このまゆき先輩に偶然会えて嬉しいでしょ？」

ぐいっと身を乗り出して、睨んでくる。

義之「そ、それは、もう・・・」

結局、そう答えるしかないわけで。

嫌いではないんだけど、苦手なんだよな、まゆき先輩って。

どうやっても、勝ち目無いって言うか、オモチャにされるって言うか。

俺の回答に満足したのか、まゆき先輩はふふんと笑みを浮かべる。

まゆき「んじやさ、ちょっと付き合ってよ」

義之「付き合うって、どこへ？」

まゆき「ちよっと、そこまで」

そう言って、まゆき先輩は俺の手を掴んだ。

義之「そんなしなくても、別に逃げないですよ」

まゆき「そう言って、昔、何回も逃げたのは誰だったかしら？」

ジロリとまゆき先輩に睨まれる。

義之「あ、あはは・・・」

まゆき「ほら、とっとと行くよ、あたしもあまり時間無いから」

そう言って、俺はまゆき先輩に拉致（人聞き悪い事言うな！）同様に連行されたのは、生徒会室だった。

フェイト「あれ？ 義之？」

そこに居たのはフェイトだけだった、コの字に並べられた机の1つのイスに座って書類（かな？）の処理をやってるらしい。

まゆき「フェイトだけ？ 裕也は？」

フェイト「裕也でしたらバイトです」

まゆき「ああ、そうだったね、翠屋だっけ？」

フェイト「はい、そうです」

みどりや
翠屋とは正式名称を喫茶翠屋きっさみどりやといい、なのは家の高町家たかまちが家族で経営している年中無休の喫茶店だ。

フェイト「で、まゆき先輩、義之を連れてきたのはどうしてですか？」

まゆき「ああ、そうだった」

義之「忘れられてた!？」

連れてきたのはまゆき先輩なのに!？」

まゆき「ごめん、ごめん、実はさ弟くんに大事な話があってね」

そう言って、まゆき先輩は真剣な表情をして俺の方に視線を向けた。

うーむ、大事な話ね・・・、想像がつかん

まゆき「ま、単刀直入に言うわ、弟くん、生徒会の仕事、手伝わない？」

義之「・・・、はあ？」

フェイト「ふえ!？」

あまりに予想外な展開に俺もフェイトも間抜けな声を出してしまっ

た。

まゆき「いわゆるヘッドハンティングってやつ？ 弟くんの力を生徒会に貸して欲しいの」

義之「いや、その……」

予想外すぎるまゆき先輩の提案に思考が空回りする

まゆき「基本的にね、あたしは認めてるの。弟くんを筆頭に杉並、板橋、雪村や花咲たち付属3年3組の連中の能力の高さはね、だからこそやっかいなのよ。その能力の使い方を徹底的に間違えてるしフェイト「あはは……」

いや、そんなことを言われても。

ってか、そもそも俺を筆頭にしないでほしい。（俺は戦○BA○A RAの眼帯の独眼竜ではない）

まゆき「ぶっちゃけ、手が回らないのよね。今の生徒会のメンバーだけじゃ、数はそこそこ居るけど、能力的にはあんたたちに敵わないから、だから、弟くんに目をつけたわけ」

義之「……なんで、俺なんですか？」

まゆき「んなもん、決まってるじゃない。1番落としやすいからよ、音姫おとめが苦労しているのは弟くんも知ってるでしょ？ さっきのやりとりを見てもわかるとおり、通常業務だけでも音姫にかかってくる負担ってのは相当大的いの、さらにクリパでは色々と問題が起きるからね」

そう言って、まゆき先輩はジト目で俺を見る。

義之「だから、俺は音姉おとねえに迷惑をかけるようなことはしないって」

まゆき「それじゃあ、意味がないのよ、弟くん自身はそう思ってるかもしれないけど、杉並や雪村は弟くんを利用しようとするわ」
義之「それは、まあ……」

あいつら、なにかことがあるたびに俺に接触してくるしな。

まゆき「気がついたら、知らぬ間に弟くんが計画の中心に仕立てられている可能性も考慮できる、なんだかんだ言って、弟くんの影響力はバカにならないからね。本人にその気も、自覚もないとしても

さ、んで、生徒会としては、その可能性がある限り、弟くんのマークを外す訳にはいかないのよねえ、それも、危険ランクAだから、それなりの人員の割り当てが必要だし」

義之「・・・・・・」

フェイト「あははは・・・・・・はあ」

まゆき「だったらさ、弟くんをさ、生徒会こっちに取り込んだじゃったほうが安心でしょ、基本的能力が高い上にランクAの人物たちとも接点が多い、言ってしまうえば、首輪の鈴としては最適な人材なんだよね」
義之「・・・・・・」

まゆき「それに、弟くん。音姫のために騒ぎを起こさないって言ってるけど・・・・・・、ほんとのところさ、少し物足りなさを感じてるんじゃない？ 本来はさ、生徒会側こっちの人間なんだし」

そう言って、まゆき先輩は挑発的な笑みを浮かべた。

微妙に反論できない感情があるところが少し悔しい。

まゆき「だったらさ、正しい側の方で正々堂々と大暴れすればいいじゃない、きつと、音姫も喜ぶと思うよ、すっごく甘ったるい笑顔で、弟くん、一緒に頑張ろうね♪ とか言っちゃってさ」

頭の中に、まさにその映像が思い浮かんだ。

音姉のことを言われると、ちょっと弱いな。

確かに、色々迷惑とか掛けてきたし。

手助けしてあげたいって気持ちも確かにある。

まゆき「ま、あたしが言いたいのはそれだけ、嫌なら嫌で、断ってくれてもだけどさ」

そう言いながら、まゆき先輩は指をコキコキと指を鳴らす。

フェイト「まゆき先輩！？」

義之「そ、それって脅迫って言うんじゃない」

まゆき「おほほ、人間きの悪いこと言わないでよ。これは、交渉よ」
圧倒的力関係の差がある状況で、なにが交渉なんだろうか。

フェイトもまゆき先輩の後ろでごめんって両手合わせて頭下げてるしまゆき「ってことで、もう1回聞いわ。弟くん、生徒会の仕事、手

伝わない？　とりあえずクリパの期間だけでいいから」

そう言って、まゆき先輩は小首をかしげた。

義之「……………」

生徒会の手伝いね。

正直、この展開は全然考えてなかったな。

普通にクラスの連中とクラス出展するつもりでいたからな。

例のセクシー寿司パーティーがどう転がるのかの予想が全然できないけど。

ま、でも、生徒会の手伝いをするという選択も悪くないのかもしれない。

音姉の助けができるってのは大きいしな。

少し面倒くさいって気持ちもあるけどさ。

義之「……………」

俺は少し考えた後、まゆき先輩に答えを返した

義之「申し訳ないですけど遠慮させていただきます。」

俺は自分の気持ちに素直に応えた。

まゆき「ふうん、このあたしが頼んでるのに断るんだ？」

まゆき先輩の目がスーッと細められる。

猛禽類が獲物を狙う時のような目。

って言うか、完璧に脅迫だよなあ、これ。

思わず、やらせていただきますと答えたくなってしまう。

フェイト「それじゃ、脅迫ですよ、まゆき先輩……」

まゆき「なにか言った？」

フェイト「いえ、なにも……………」

フェイトは下を向いた

義之「やりません」

俺は念のためにもう1回言った

何よりせつかくのクリパライフを生徒会の手伝いで棒に振りたいくない。

俺が言うと、まゆき先輩の顔が近づいてきた。

まゆき「・・・・・・・・」

義之「・・・・・・・・」

少しの間、見つめあう。

まゆき「・・・・・・・・」

と言うか、にらみ合う？

戦力的に圧倒的な差があるので、にらみ合いにならないけど。

まゆき「・・・・・・・・」

ってか、距離が近いですって！

吐息のかかる距離でまゆき先輩はじつと俺の目を覗き込んでいる。

きりつとした綺麗な顔立ちで間近に迫られて、思わず視線を逸らしてしまう。

なんか、いい匂いするし。

まゆき「やっぱだめか」

まゆき先輩がふっと、表情を和らげた。

まゆき「うーん、残念」

義之「すんません」

まゆき「いや、別にあやまんなくてもいいよ。最初から無理だろうなあーって思ってたから、つくか、もし手伝ってもらえたらラッキーくらいのイメージでいたからさ、弟くんには弟くんの都合があるもんね」

義之「そりゃ、まあ」

まゆき「んじゃ、今日は帰っていいよ。時間とらせてごめんね」

義之「はい、失礼します」

俺はまゆき先輩とフェイトにお辞儀をして、回れ右をする。

まゆき「ま、気が向いたらいつでも訪ねてきてよ、生徒会はいつでも弟くんの手助けを待ってるからね」

俺はまゆき先輩の声を背中に聴いて生徒会室を後にした。

ヘッドハンティング（後書き）

義之「まさか、生徒会に誘われるとは予想外だったな、ん？ あれ
は由夢^{ゆめ}か？」

由夢「兄さん一緒に帰りましょ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4465y/>

D・C?なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士

2011年11月21日12時11分発行